

2022/4/8

(うと Q 世話し 人質) 書庫版



余りにも恐ろしい想像で迷ったのですが。

我が国の全ての若い母親がという訳ではなく、30代位の著名都市部郊外住宅地在住、高学歴専業主婦において顕著な傾向で

スマホばかり見ていてベビーカーの子供の顔に一度も目をやらない。

その子供に話しかけもしない。

並んで歩かないし抱きしめもしない。

「外国の親子と違うのは何でなんだろう？」

とずっと不思議に思っていたのですが或る時唐突に

「人質」

という言葉が思い浮かびそれで合点がいきました。

正しいかどうかの判断以前にそう考えると全ての点で辻褃が合うと思ったのです。

悪条件消去法で「自由恋愛もどき」の結婚をした。

そろそろ行かないと格好悪いからか？働かずに自由時間を楽しめるからか？旦那さんには高値で売り付け、仕えさせ、女子会の軍資金提供者にする積りだったのか？

は知りませんが色々な打算の末に兎に角結婚をした。

しかし元々相手に惚れてした訳ではなく単に悪条件消去法の適用結果に過ぎないのでそもそも乗り気でも熱がある筈もなく出来れば旦那さんとは距離を置きたいのが本音本心。

しかしこの魂胆に相手が気づいたら幾ら何でも身分の保証はされまい。

なので、仮にそう感づかれたとしてもおいそれとは別れられない強制的な状況を作らなくてはなるまい。

自分の母親や同世代の高学歴な女友達がした様に。その自分の母親との日頃の作戦会議で決めた通りに。

という事で「子は鎧 (かすがい)」ではなく「子はこれからの己が身分保障の担保」として作った。

それが別名「人質」

相手の親や何かのきっかけで離婚する羽目になった時の交渉優位保持材料としてはぜひとも必要だし、

話の弾まない夫との気まずさの緩衝材として、或いは「子供の世話で忙しいから」という合理的エスケープの材料としても必要だろう。

しかし人質を得たものの、元々人質なのでまずは「逃げられては困る」

本来なければ無しで済ませたい人質なので「手間をなるべく省きたい」

かといってあまりに邪険に扱いすぎると世間様からの「国際人道法上の問題」を誘発しかねないので表向きはそれなりに丁寧に対処する。

例えばフード付きチャイルドシート付自転車を取り回すとか。

ですがそれは見せかけの体裁だけの話でしかない。

元々が人質なので「元来帰属権はあちらのもので面倒を見る主体は相手方にある」

だからスマホばかり見ていて声もかけず抱きしめもしない。

できれば「担保権だけ残して子供には消えてほしい」

というのが本音本心。

そう考えますと疑問に思っていた不可解な行動の全ての辻褄が合いました。

しかし是が本当だとすると何ともはや恐ろしい世の中になったものです。

どこやらの国の侵略行為や無法な人質作戦が、そこまで悪辣ではないにしろ我が国のそこかしこで人知れず日々起こっている。

侵攻されたその国の何の罪咎もない人達同様、本人の意思を無視して交渉の盾にされた我が国の子供達も又、気の毒に思えてなりません。